

トマト灰色かび病防除のための効果的な薬剤はこれだ

病害虫研究担当 小巻康平

トマト灰色かび病は収量への影響が大きい病害で、様々な薬剤の耐性菌が全国的に報告されていることから、県内に発生している病原菌について薬剤感受性検定を実施しました。その結果、広く使われているSDHI剤^{注1}のペンチオピラドおよびQoI剤^{注2}のアゾキシストロビンでは50%以上の菌株が耐性菌と考えられました。また、複数年の薬剤感受性検定の結果からSDHI剤のイソフェタミドやピラジフルミドでも耐性菌が検出され始めています。耐性菌が見つかった薬剤はいずれも効果的な種類であるため、多用される傾向が見られました。以上のことから、SDHI剤およびQoI剤は多用を避け、別系統の薬剤に置き換えて体系的に防除を行う必要があると考えられました。

一方でメパニピリムおよびフルジオキシニルは耐性菌が検出されなかったため、SDHI剤およびQoI剤の代替として薬剤散布ローテーションに導入することで耐性菌が発生するリスクが低く、灰色かび病防除に効果的な散布体系となると考えられました。

注1) コハク酸脱水素酵素に作用して病原菌の呼吸を阻害する剤。

注2) ミトコンドリアの電子伝達系に作用して病原菌の呼吸を阻害する剤。

表1 県内採取のトマト灰色かび病における薬剤感受性検定の結果

Fracコード (作用機作)	薬剤名	耐性菌率(%)	
		2020 ~2021	2023
7 (SDHI剤)	ペンチオピラド	68	25
	ピラジフルミド	5	33
	イソフェタミド	0	17
9	メパニピリム	0	-
11 (QoI剤)	アゾキシストロビン	75	67
	ピリベンカルブ	0	0
12	フルジオキシニル	0	-